

軍事研究

JAPAN MILITARY REVIEW

2010 **1**

特集 キャンプ座間、米陸軍第1軍団前方司令部

湾岸戦争“大戦車戦”戦車7000両の激突! 史上最大・最後の機甲戦 Type75 SPG of 11st AU, JGSDF in gunnery training.
『停戦命令』生き残った共和国親衛隊

単独インタビュー!

第1軍団前方司令部ワーシンスキー司令官に聞く
座間第1軍団前方司令部の実態

日本占領から朝鮮へ 第1軍団の朝鮮戦争史



決着か!? 米露核軍縮交渉 / 規制緩和でポロポロ、新GPS衛星の開発 / イラン核開発の最新動向 / 米海軍新型哨戒機P-8 / F-X選定問題と国産戦闘機の可能性

軍事研究

JAPAN MILITARY REVIEW

2010 1

キャンプ座間、米陸軍第1軍団前方司令部

戦争“大戦車戦”戦車7000両の激突! 史上最大・最後の機甲戦
『戦車命令』生き残った共和国親衛隊
インタビュー!

1軍団前方司令部ワシンスキー司令官に聞く
間第1軍団前方司令部の実態
本占領から朝鮮へ 第1軍団の朝鮮戦争史



着か!? 米露核軍縮交渉 / 規制緩和でポロボロ、新
PS衛星の開発 / イラン核開発の最新動向 / 米海軍
型哨戒機P-8 / F-X選定問題と国産戦闘機の可能性

軍事研究

軍事研究 キャンプ座間、米陸軍第1軍団前方司令部

軍事研究

子どもも大人も同級生。
みんな、行きたくなる学校があります。

世界遺産に登録された合掌集落の地、岐阜県白川郷。
この白山麓のふところに、ユニークな宿泊施設があります。
トヨタ白川郷自然学校。ここは、温泉と食の恵みを堪能できるオーベルジュ。
そして、伝統文化に触れ、大自然と対話する学びのフィールドです。
季節の体験プログラムや環境との共生プロジェクトに、あなたも参加してみませんか?
企業研修・ゼミなどでもご利用いただけます。どうぞ、みなさままでお越しください。



おすすめプログラム

● ナイチャーガイド

10:30~10:30 10:15~11:15
料金はガイドツアーに含めます。

● 森の夜食

19:30~20:30 料1人1,000円(小学生)

● 季節のガイドウォーク

10:00~12:30 料1人2,500円
(小学生・高校生以上は別途)

レジャープラン料金

※1人様1泊2食1ナイチャーガイド(体験型ツアー)付
大人 10,800円〜 / 子供 8,500円〜

- 朝食または夕食、宿泊されるグループの人数に合わせてお部屋をご用意します。
夕食はフロントのバーコース、朝食はカフェテリア方式の朝食となります。
- 大人、子供ともにプラス2,000円(夕食をフルコースに変更可能です)。
- 小学生未満、幼児は別途料金がかかります(1歳未満は無料、1歳以上は別途お問い合わせください)。

学校・企業研修等、団体向けプログラムのオーダーも承ります。

- “導入社員へのフォロー研修や”若手管理職もしくはリーダーシップを必要としている方々、
への研修費用負担が可能な、研修研修や出張を承ります。具体的な研修プログラムを
ご提案いたします。
- 自然体験を中心としたプログラムもご要望に合わせてご提案いたします。
- 学校研修の目的やご要望に合わせてアレンジいたします。

定価 1050円 本体 1000円

星空と温泉と自然体験のエコツアー



TOYOTA Shirakawa-Go Eco-Institute
トヨタ白川郷自然学校



ご予約・お問い合わせ 〒501-0620 岐阜県大野郡白川町高野223 Tel.05769-6-1187 http://www.toyota-eco-inst.jp e-mail info@eco-inst.jp

雑誌 03241-01
ISSN 0533-6716



4910032410103
01000



ヤマトプロテックは、総合防災メーカーとして、
「かけがえのない人命と財産を守りたい」という思いを掲げ、
一世紀近くにもわたり防災事業に携わってまいりました。
これからも皆さまの信頼にお応えできるよう、
安全な社会づくりに貢献していきます。



PFOS対応泡消火薬剤

倍加性能粉末(ABC)消火薬剤

ヤマトプロテック株式会社

■ビル防災設備 ■プラント防災設備 ■消防・警報設備 ■消火器

http://www.yamatoprotec.jp/ 0570-080100

■本誌好評連載の単行本化。最新刊完成!



図説 **アメリカ空軍の次世代航空宇宙兵器**

河津幸英・著

世界最強の汎地球遠征能力!
Global Force戦力ロードマップ2006-25

【主内容】

- カラー8頁
- 米空軍改革&エア・スベリオリティ戦闘機F-22ラプター
- 2020年の宇宙戦争に勝つ軍事衛星&宇宙兵器
- マルチセンサー有人・無人偵察機
- グローバル・アタック攻撃機&戦闘爆撃機
- Bシリーズ爆撃機&NGB次世代爆撃機/極超音速兵器
- C-5/C-17巨人輸送機&空中タンカー戦力
- 宇宙打ち上げ戦力EELV&AC-130特殊作戦機

A5版並製・353頁 定価2730円 www.sanshusha.co.jp

行/企画アリアドネ企画 発売/三修社 〒150-0001 東京都渋谷区神宮前2-2-22青山熊野神社ビル1F
TEL 03-3405-4511・FAX 03-3405-4522

「停戦命令」生き残った共和国親衛隊

特集 キャンプ座間・米第1軍団前方司令部

単独インタビュー米陸軍第1軍団前方司令部
司令官ワーシンスキー少将に聞く

移動展開可能な新しい戦域司令部
キャンプ座間・第1軍団前方司令部の組織と任務

日本占領から、朝鮮へ

第1軍団の朝鮮戦争史

新戦略兵器の配備を狙う米国

新たな米露核軍縮交渉の裏側を読む

ミサイル防衛政策の現実路線化は
オバマ政権のMD事業仕分け

軍事情報
研究会 (12)

宇垣大成 (28)

齊木伸生 (28)

宇垣大成 (37)

藤井久 (44)

小泉悠 (56)

野木恵一 (68)

14億ドルが減額されたMD関連予算。だがオバマ政権はMD計画から撤退はしない

ワーシンスキー少将に第1軍団前方司令部を日本に置く目的と意義、その機能を聞く
司令部組織は小規模だが任務と機能は柔軟に大きく拡張可能。それが前方司令部だ

日本とニューギニアのジャングル、フィリピンと戦い抜き大阪に軍団司令部を設置
オバマ政権の出現でロシアとの間でSTARTの後継となる核軍縮交渉が動き出した

単独インタビュー アメリカ陸軍第1軍団前方司令部 司令官ワーシンスキー少将に聞く



キャンプ座間に発足した「第1軍団前方司令部」とは如何なる組織なのか。「1CoF already has that great relationship, already established (第1軍団前方司令部は日本との強い絆をすでに築いている)」と強調する司令官のワーシンスキー少将に、第1軍団前方司令部を日本に置く目的と意義、その機能を聞いた。

(聞き手) 宇垣 大成 (文) 齊木 伸生

アメリカ陸軍第1軍団前方司令部が、キャンプ座間にやって来る。このトピックは、これまで「軍事研究」誌上でも何度か取り上げられたこともあるホットな話題である。当初は第1軍団の司令部が司令官の中将与五〇〇名の人員まるごと移転するとか、大将を司令官とする北東アジア司令部ができるとか、おどろおどろしいうわさがたつたものである。実際に発足したのは第1軍団前方司令部 (1st Army Forward Command) という聞き馴れない組織で、司令官は在日米陸軍司令官が兼務、さらに第1軍団副司令官も兼ねている。司令部の隷下部隊といえるものも、ごく少数の付属部隊だけということ、一般にはその任務、内容はいまだに「ぬえ」のようによくわからないままである。

今回は特別な許可を得て、米軍キャンプ座間を訪れ、第1軍団前方司令部司令官のワーシンスキー少将にインタビューし、かつ司令部施設取材することができた。当日のインタビューは軍事評論家の宇垣大成氏、コディイネイトおよび写真撮影は本誌編集部、文構成は斎木伸生が担当した。なおインタビューはこちらは日本語、米軍側は英語で、基地側の通訳が日英、英日の翻訳を行った。原稿化

にあたって、当日収録したものを日本語および英語原文にあたって、再編集を行った。

第1軍団前方司令部の目的

宇垣「本日はこのような取材の機会をいただき、どうもありがとうございます。」

まず小誌についての説明をさせていただきたいと思います。日本にはいくつもの軍事雑誌がありますが、すでに四〇年以上の歴史がある小誌は、自衛隊や米軍、中国やヨーロッパなど、世界各国の軍事情勢や防衛のトピック

クを扱った総合的な軍事雑誌として唯一の、非常にユニークな存在だと考えています。

読者層は研究者、防衛省、自衛隊関係者、国際情勢に関心のある方、それからここ十年はこうした話題に関心のある一般の読者も増えて来ていると思います。

ではさっそくですが、アメリカ陸軍が第1軍団の前方司令部を、日本に置いた目的というのはいかなるものなのでしょうか。

ワーシンスキー「第1軍団の前方司令部というのは、アメリカ陸軍の中でも非常にユニークな機能を持った組織です。」



フランシス・J・ワーシンスキー少将略歴
米国ペンシルベニア州ディクソン市出身。1979年に米陸軍士官学校を卒業後、歩兵少尉に任官される。その後ジョージア州フォート・ベニングにて第75レンジャー連隊第3大隊1科長(人事)、B中隊長、3科長補佐を歴任し、パナマのジャストコース作戦に参加。
その後、フォート・キャンベルに戻り、第101空挺師団(空中攻撃)第3旅団長として指揮を執り、アフガニスタンにて不朽の自由作戦に参加。
2005年7月から2006年6月まで第25歩兵師団副師団長(支援)、2006年7月から2007年12月までイラクの自由作戦を支援するため展開した多国聯北師団副師団長(支援)を歴任。
2008年1月2日から2008年6月30日まで太平洋陸軍副司令官を務め、現在は在日米陸軍および第1軍団(前方)司令部の職にあり、結婚して30年になる妻ジュニーンと共にキャンプ座間に居住している。
国防精勵軍務勲章、勳功勲章(4回)、銅星勲章(「V」字)、銅星勲章、国防功勲章、功績勲章(6回)、陸軍功労賞(2回)、陸軍任務遂行章(2回)、戦闘歩兵兵士章(星付)、歩兵戦機特級記章、上級落下傘降下記章(銅星付)、レンジャー記章、国防長官府記章および統合参謀本部記章を受章・取得(2009年3月付)。

場所だからです。我々がこれまで数年間に教訓として学んだことは、自然災害あるいは人為的に構成された作戦のいずれであって、作戦において一番難しいことは、状況の中での出だしの指揮統制と、状況把握の二点なのです。そして地上において利用できるリソースが



第1軍団前方司令部が入る建物のエントランスには鳥居のモチーフが壁に、パッチがカーペットに配されている

「いうことは考えられるのでしょうか」
 ワーシンスキー「第1軍団に関しては、現在イラクに展開していますので、いまは現実には無理なのですが……」
 現在のアメリカ軍は、いまやひとつの場所に特定して考えることはできません。というのも我々は世界中にローテーション展開しますから。第1軍団前方の魅力といえるのは、

派遣されて来たのであればいかなる部隊とも、ともに作戦できるところにあります。もし、いま日本で何が起これば、第1軍団は日本本土を防衛できないわけですから、第1軍団前方は他の軍団、他の統合任務部隊、他の軍種と作戦することが可能です。第1軍団がどこかにローテーションで派遣されるときでさえ、我々がカバーできないという

「ハット」を被って
 宇 壇「たいへんよくわかりました。そうすると第1軍団前方は多様な部隊を作戦指揮できるといえることがありますが、具体的には難しくても、現在の前方司令部の作戦指揮能力について司令官から説明いただけないでしょうか」
 ワーシンスキー「私は日常の仕事において、ふたつ星の少将としていろんな任務を担当しています。まずは在日米陸軍の司令官、北海道から沖縄までの米陸軍の司令官になります。それから第1軍団前方の司令官でもあります。これは在日米陸軍とは別の組織です。そして在日米軍ライト中將隷下の陸軍部隊司令官でもある。日本に駐留する米軍施設の長でもある。私はいろいろな職務を兼務しているのです（ハットを被っている）。」
 ただ、第1軍団前方が展開する場合は、私が司令官となるので、そのときは在日米陸軍司令官は副司令官が勤めることとなります。



「Now, no matter what happens, 1CoF are here, this state. (なにが起ころうとも、我々はこの状態にいます)」と語るワーシンスキー少将。右は聞き手の宇壇大成氏

力を持っていなければ問題に発展するのです。我々の小規模な指揮統制部隊であれば、そしてすでに現地にあり、戦略的な位置にあれば、日常的に活動し、周辺の安保状況を理解し、地理的な認識を有して、人々を理解し、日常的ベースで相互的な関係を構築すれば、問題は起こらないのです。これらすべてはあらかじめ現地にいるからこそ、何かあったときうまくいくのです」
 宇 壇「アメリカ本国防衛司令部、オーストラリアに第1軍団の司令部があります。アメリカ本国防衛司令部と、これらの前方司令部との機能や役割の違いは、具体的にどのようなものになるのでしょうか」
 ワーシンスキー「アメリカ軍には四つの軍団があります。第1軍団がワシントン州、第3軍団がテキサス州、第18空挺軍団がノースカロライナ州、そして第5軍団はドイツにあります。これら四つの軍団は、大規模紛争における大規模な軍事作戦に投入されるものです。これらの軍団は、ローテーションを組んでイラクやアフガニスタンに展

開しています。これらに対して、第1軍団と第1軍団前方司令部は名前が似ているだけです。実際に第1軍団と指揮統制関係があるわけではありません。第1軍団前方のひとつの魅力としては、他のいかなる部隊とも、やって来たまさにその瞬間から連携できることがあります。彼らの到着の前にも何もかも準備できるのです。例をあげれば、ヤマサクラ演習では第1軍団前方は北海道に最初に展開して、最初の指揮統制機構を立ち上げます。現段階だと、第1軍団は使えない、第3軍団は展開のための準備をしている、第18空挺軍団はイラク、アフガニスタンの任務から帰って来たばかり。一番近くに対応できる指揮組織といえば太平洋陸軍だ。それでその司令官といっしょに作戦を実施するわけです。第1軍団前方は誰とでもうまくやれるのです」
 宇 壇「そうしますと有事や危機発生時に、アメリカ太平洋軍の陸軍部隊として知られている第1軍団の本隊、すべてとは言わずとも部分的に日本の国内に展開する、そういう可能性が十分あると考えるものでしょうか。それとも場合によっては第1軍団の親組織、そのものがワシントン州から展開すると

なかなか米陸軍の中でも、このように業務を兼務するということはありません。我々が抱えている幕僚も、通常であれば在日米軍の幕僚は在日米軍の幕僚、第1軍団前方の幕僚は第1軍団前方の幕僚と分けています」

宇 垣「複雑でたいへんなお役目を担っていらっしゃるということがよくわかりました。次に、これからの陸上自衛隊との関係なのですが、第1軍団前方司令部とその指揮下に入る部隊の日本の防衛における主な役割と、これからの自衛隊との関係がどうなっていくのか。お話しただければと思います」

ワ シンスキー「まずすばらしいことは、まさにいまここにいらっしゃる人々（座間の米軍と自衛隊）が非常に良好な関係を築き上げていることです。そして私は演習で出張する際に、陸幕だけでなく五つの方面隊の方達と、そして中央即応集団の方達と、お互い個人として極めて強固な関係を築いていることを実感します。このような関係を築いていることが、実際作戦を行う際にはとても重要で、最強の要素となってくれると思います」

たとえば来たるヤマサクラ57に備えて、現在の北部方面隊総監の酒井健将とは、一生懸命に準備しています。そして同時に現在

西部方面隊総監の用田和仁将とも、すでにヤマサクラ59について協議しています。そしてまた中部方面隊ともオリエント・シールド演習も行っています。我々はちょうど二週間



フリーフィンクルームの地図を前に解説するワシンスキー少将

前に中央即応集団の方達と、キャンプ座間移転に関する件で話し合いました。これら私がいままで述べたことは、二者あるいは複数の関係者が共に加わって、毎日行われているのです。

もし我々がここにいないければ、日本で災害が発生した場合など、新たな部隊が関係性を築く必要があり、迅速に、災害に対処するのは困難ではないでしょうか。第1軍団前方司令部は、すでに日本と強い絆を築いているのです。

そしてもともとのご質問にお答えしますと、我々と陸上自衛隊との関係は非常に良好なものなので

宇 垣「これは良く聞かれるのですが、我々の隣国、北朝鮮はいくつもの種類の弾道ミサイルを保有し開発も続けています。ミサイルの数も生産中で増え続けています。よく発射試験も行っています。そこで将来ミサイル防衛という、本当に日本の防衛のために備えなければならぬときに、米陸軍前

方司令部はミサイル防衛に関してどんな機能があるのでしょうか」

ワシンスキー「実際にどのように防衛にあたるかという点については、機密事項にあ



キャンプ座間のヘリパッドには本格的な鳥居がある

るので詳細についてはお答えできませんが、私の言えることとしては、第1軍団前方と、日本の航空自衛隊、海上自衛隊、そして第7艦隊、米空軍、米陸軍とも、すでに完全に統合された組織となっています。各々の部隊は、組み合わせられた指のよう

なものです。それによって総合的な能力を発揮できるのです。

ひとつ言えることは、今年四月に北朝鮮が日本の国土領上を飛び越える弾道ミサイルを発射したときは、ちょうどお花見の季節だったと思いますが、その当時約三万人の地域住民の方々がキャンプ座間にお花見にいらしていました。それでも第1軍団前方の要員は働いていたのです

宇 垣「わかりました。これが最後の質問になると思いますが、近い将来整備される第1軍団前方司令部のための施設とか導入予定の装備とかありましたら、お教えいただければと思います」

ワシンスキー「第1軍団前方には、最新装備があります。

A B C S システム（陸軍戦闘指揮システム）という装置、バトルコマンドシステムです。

このシステムはデジタル的に統合されたシステムです。非常に高い能力の通信システムも有しています。通信システムは二種類あって、ひとつは指揮所、コマンドセンターに配置されている固定の通信システムです。もうひとつは移動可能な通信システムです。固定システムがここに留まる一方で、いかなる場所であろうとすばやく展開して、指揮統制を可能にするためのものです。

そして、もうごせんじかもしませんが、バトル・シミュレーション・センターが相模補給処に建設中です。完成しましたらご紹介したいと思います。このシミュレーション・システムですが、これはバーチャル世界において、いろいろなシナリオを用いて演習を行うことができます。つまり実際に車両や人員を使って演習を行うのでなく、シミュレーションシステムを使ってバーチャルに演習を行うことができます」

宇 垣「そのセンターの完成予定はいつ頃でしょうか」

ワシンスキー「来年（二〇一〇年）九月の予定です。すでに基礎は完成しております、

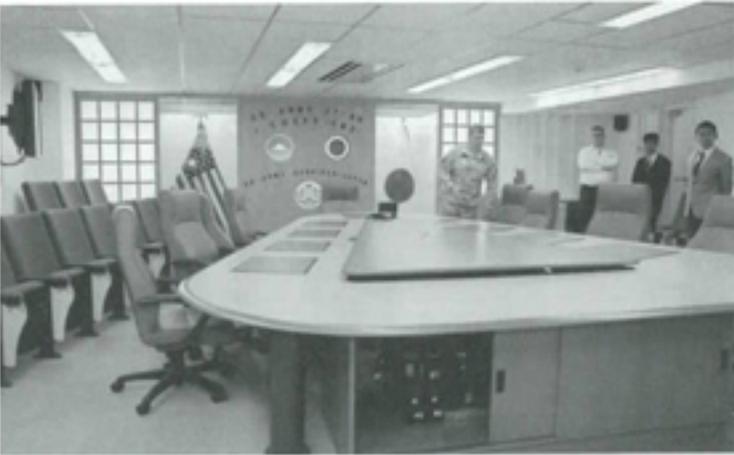
あとは仕上げと装備の揃え付けだけです。ちょっと部屋を変わります。地図を用いて説明したいと思います」

ここで少将から勧められて、フリーフィングループへと移動し、インタビュが続けられた。

フリーフィングループには、壁一面の世界地図がかけられていた。アメリカ本土で見るように、アメリカ大陸が中心となっているのではなく、日本で見ると同じく太平洋が中心にあり、左右に向かい合わせに日米が描かれた地図だ。これは、少将の発表によるものとのことだが、実際に第1軍団前方が指揮統制する地域は日本なのだから、これが筋だろうという話だ。ワシントンDCに在るわけでもなく、チエコスロバキアのプラハに在るわけでもなく、東京に在るのだから。

「何が起ころうとも、我々は此所に在る」

ワシンスキー「(日本を指して) 第1軍団前方はここです。(アメリカ本土ワシントン州を指して) ここが第1軍団、(テキサス州を指して) ここが第3軍団、(ノースカロライナ州を指して) ここが第18空挺軍団、そして(ドイ



隊はすでに作戦に加わっていたり速すぎたりするかもしれませんが、我々は短期間ですが支援することができます。またマリアナ諸島で台風が発生した場合なども支援に出動します。その他なんでも、北



海道でも沖縄でも、宮城内陸、中越沖地震でも、出動します。こうやって地図で説明した方がイメージがつかみやすいでしょう。宇垣「はい、イメージがよくわかりました。ちなみに私は以前「軍事研究」誌上で、アメ

コマンド・センター付属の第1軍団前方司令部カンファレンス・ルームは、温かみのあるデザイン。テーブルには各人用のコンピューターが備え付けられている

リカ軍全体の編成や展開地域等原稿を書いたことがあるのですが、アメリカ軍はグローバルなコミットメントをしていること、部隊が動いてしまうので、アメリカ合衆国軍というものが何かと質問されると、非常に説明が難しいのです。今回は陸軍についてでしたが、仕組みが非常に簡潔でわかりやすく、ありがたい解説でした」

ワシンスキー「理解いただけでうれしいです。私もたまに混乱することがあるものですから。

いま米軍は再編を行っておりまして、やはり米軍も作戦によっては大規模な部隊を用いる必要はないという事に気づいています。日本には第1軍団前方がいます。それで、たとえば地震があったとき、第1軍団前方が考えるのは、本国に部隊の派遣を要請するわけですが、歩兵もいない、戦車もいない、砲兵もいない、何が必要といったら、兵站、通信、衛生、そして工兵さえあればよいのです。そうした機能が必要という事を認識して本国に部隊の派



特殊構造のドアと壁の奥にある、指揮所(コマンド・センター)。灰色と黒の室内にコンピューターや大型モニターが並び無機質な雰囲気だ

ツを指して) ここが第5軍団です。そしていまもちろん一番重要なんですけど、(ハワイを指して) 米太平洋陸軍司令部、(韓国を指して)

在韓米軍、最後に(アラスカを指して) 在アラスカ米軍部隊。なお韓国に駐留している部隊に関しては、どこに展開することもなく、韓国に留まります。ハワイに駐留している米太平洋陸軍司令部は、太平洋地域にある米軍全部を活用できます。

9・11事件以前は、第1軍団は(日本を指して) この地域に焦点をあてていと言えましたし、そして第1軍団前方も存在しなかったわけです。しかし、その後活動範囲が広がります。いま第1軍団は(付箋を動かして) ここに在る。第18空挺軍団は(付箋を動かして) ここに在る。そして(次々と付箋を動かして) この部隊は展開の準備中。この部隊は移動しない。いま、日本周辺の重要地域には何もいないのです。それで第1軍団前方がここに配備されるわけです。

何が起ころうとも、我々はここに在るのです。それで、問題なく機能し続けるのです。何かあった場合、たとえば地震があった場合、他の部

アジア有事には米4軍を指揮する
移動展開可能な新しい戦域司令部

キャンプ座間 第1軍団前方司令部の組織と任務



平時の司令部組織は小規模だが、任務と機能は柔軟に大きく拡張可能。それが前方司令部の印象だ。その任務は二つ。一つは有事展開する増援米軍部隊の調整・運用や陸自への情報支援。もう一つは必要な場所に移動・展開して実施する陸自や東アジア地域の国々との共同演習・作戦である。(資料提供：在日米陸軍司令部広報室/U.S. Army Japan I Corps Forward)

(軍事評論家) 宇垣 大成

バクバクにおいてイラク首脳へのヘリ輸送を警備する第2歩兵師団ストライカー旅団

キャンプ座間で立ち上がった陸軍の戦域司令部
○九年一〇月に本誌取材班の一員として、在日米陸軍の第1軍団前方司令部を取材する機会に恵まれた。同前方司令部は、二〇〇五年の日米間で在日米軍再編合意で、在日米陸軍の司令部が展開可能で統合任務が可能な作戦司令部組織へ近代化することが明記され、米本国の陸軍第1軍団(1CER)司令部(ワシントン州フォートリス)を母体として立ち上げられ、二〇〇七年二月一九日に現在の神奈川県キャンプ座間で発足した。それまではJEXと呼ばれていたものだ。
母体となった米陸軍第1軍団自体は、ハワイ州に司令部を持つ米太平洋陸軍の主力で、現在四個ある現役軍団の一つであり、約四万人の総兵力を有するが、キャンプ座間の第1軍団前方司令部は、実質的にはこれとは別個の独立した米太平洋軍・米太平洋陸軍の前方司令部として、設立されている。つまり、太平洋陸軍における事実上の移動展開が可能となった新しい前方戦域司令部となっているのだ。したがって、わが国とその周辺での有事や危機発生時には、米本国の第1軍団隷下の部

遣を要請して、派遣された部隊の指揮統制を行うのです」
宇垣「なるほど、よくわかりました」
ワシンスキー「来たヤマサクラ演習におきましては、初めて第1軍団前方が参加するのですが、この構想を使って演習を行うのです。最初に第1軍団前方がまず北海道に展開し、そしてその後ハワイにある太平洋陸軍のCCPが後を占めて日本に展開します。それから二つの部隊が加わり、CCPが指揮統制を行うというシナリオです。ですからヤマサクラ演習をご覧いただくのがよろしいでしょう」
演習後にはCCPはハワイに帰り、第1軍団前方は座間に戻ります。二か月後にはヤマサクラで得た教訓を集めて、それをフィードバックさせるわけです。そして我々はまた、(地図の付箋を動かしながら)タイで行われる新たな演習、コブラゴールドに飛ぶのです。これは短い演習であり、終わったらまた日本とハワイに戻るわけです。それで他の地域で作戦が行われていても、日本周辺にはちゃんと指揮統制機能が存在するわけです。こうした演習を行う目的は、常に我々の能力を向上させることにあります。

それからこの一二月、初めて我々の基地開放を行います。とても大きなイベントです。装備品も展示します。ぜひいらしてください。レーダーや米軍だけでなく陸上自衛隊の装備も展示します。とても素晴らしい日となることを期待しております。ピザなどの出店もありますよ」
(キャンプ座間の体験デーは、二〇〇九年一月一四日土曜日九時～一七時に開催された。当日は米軍だけでなく自衛隊も参加し、車両・軍用品などの展示、および軍人による徒手格闘試合が行われた)
編纂部「とてもわかりやすい解説、どうもありがとうございました」
ワシンスキー「こちらこそありがとうございます。またおいでいただけることを希望しています」
編纂部「今日はどうもありがとうございます」
少将とのインタビューはここまでだが、この後、取材班は指揮所(コマンド・センター)の見学を許された。厳しいセキュリティのドアの向こうに指揮所があった。若干の制限はあるが、撮影も許可された。

指揮所の規模については書くことができな
いが、そこは司令部というイメージとは別の世界であった。室内にはコンピューター・ディスプレイがずらりと並び、壁には大型モニターがかかっているのだ。まるで株式取引所か商品取引所のモニタールームのような光景だ。
指揮所のさらに奥には会議室(カンファレンス・ルーム)があった。会議室はちょっと和風の装飾が施されている。ここも壁面にはモニターがはまり、各席には専用コンピューター端末が用意されている。当然、全世界の同種司令部とリアルタイムのTV会議が可能である。さすがワイルドワイドに展開する米軍である(もともと昨今の多国籍企業なら普通に見られる光景かもしれない)。ハリウッドのSF映画の世界みたい、とはアナログ世代の筆者と編纂部の共通した意見であった。
今回の取材にあたって協力をいただきました。ワシンスキー少将、在日米軍、キャンプ座間広報、その他関係者に誌上を借りまして、心から御礼申し上げます。
(INTERVIEW CONDUCTED BY UGAKI Taisei. TRANSCRIPTION DONE BY SAIKI Nobuo. PHOTOS BY OKUBO Yoshinobu.)



司令部として世界の各地に展開する。これが任務・役割についての公式の説明だ。つまり、通常はわが国とその周辺での有事に備えて、陸上自衛隊と米陸軍部隊との共同作戦に備えながら、本国の命令があれば、アジアや他の地域への移動・展開もあり得るというわけだ。

次に司令部は、平時や小規模な非常時には、どのような機能を発揮するのだろうか。現在(平時)の米太平洋陸軍におけるICoFWDの位置づけは、上級司令部である同陸軍司令部隷下の第25歩兵師団やアラスカ陸軍部隊、第8戦域支援コマンド、第94陸軍防空

ミサイル防衛コマンドと並ぶ独立した司令部組織(要員約300名)で、直接の指揮・管理下にはUH-60ブラックホーク戦術輸送ヘリコプターを持つ第78航空大隊、在日米陸軍憲兵大隊それに第296陸軍楽隊しか置かれていない。

ただし、平時・有事を通じての作戦上の調整・協同を行うテナント部隊には、在日陸軍部隊である沖縄の第10支援群(第8戦域支援コマンド隷下)、同じく沖縄の第1防空砲兵旅団第1大隊(パトリオットPAC3、第94陸軍防空ミサイル防衛コマンド隷下)、三沢と車力にそれぞれ配備されているJTAGS(弾道ミサイル早期警戒情報の解析装置部隊、第94防空ミサイルコマンド隷下)、FBX(Xバンドの弾道ミサイル追跡レーダー部隊、第94防空ミサイルコマンド隷下)、陸軍第1特殊作戦群第1大隊(通称グリーン・ペレー)、在日米陸軍医療部隊(太平洋地域医療コマンド隷下)、第58および第78通信大隊(第516通信旅団隷下)、第441軍事情報大隊(第500軍事情報旅団隷下)、第835および第836輸送大隊(陸軍輸送コマンド隷下)、陸軍在日工兵部隊(陸軍工兵部隊隷下)などがあ



沖縄駐屯のパトリオット(PAC-3)部隊である第1防空砲兵旅団第1大隊(1-IADA)のロードワーク

隊のみを作戦指揮下に置くとは限らず、発生した事態に応じて他の陸軍部隊をテナント部隊として指揮下で運用することが可能だ。また、わが国と周辺での有事に際しては、太平洋軍のもとで米陸・海・海兵・空の各軍種部隊から統合任務部隊(JTF)が編組され、その作戦司令部としてこの第1軍団前方司令部が指定されれば、文字どおり一大戦域司令部

部としての機能をも発揮することとなる。このため、同前方司令部の作戦指揮機能は想像以上に大きなものであり、現在約二四五名の在日米陸軍各部隊と米本国からわが国に展開する米陸軍部隊を指揮・運用するのみに留まらない。これは今世紀に入ってから、米陸軍がわが国の防衛への関与を極めて重視するようになったことの現れなのだが、それではこの前方司令部とは一体いかなるものなのかを、以下に見てゆきたい。

第1軍団前方司令部の役割・任務

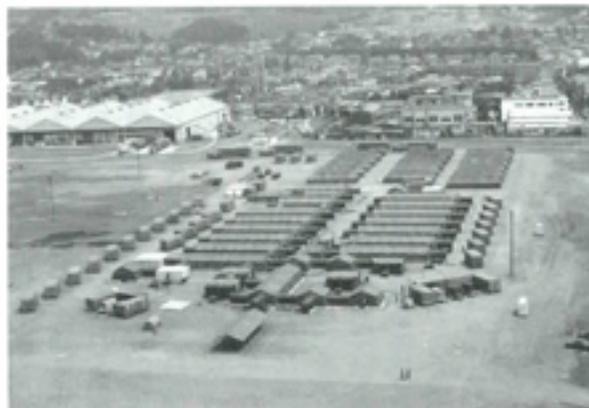
そもそも米陸軍がわが国の防衛への関与を重視するようになったと言っても、それではたして新たに立ち上げた前方作戦司令部に、どのような任務や機能を持たせているのだろうか。筆者が第1軍団前方司令部(以下ICoFWD)の関係者から受けた公式の説明によれば、大きな目的・ビジョンとして極東地域の安定のために、強固な日米同盟を支援する組織・部隊間で関連性を持った一組織であること。任務については、日本の防衛に寄与すると共に極東の平和と安全保障を維持する目的で、陸上自衛隊と共同で全次元での作戦遂行を行い、またこれを支援することである



司令部の直接指揮下にある座間の第78航空大隊(78th Aviation BN)のUH-60ブラックホーク



在日米陸軍の兵站能力：弾薬備蓄能力は6万4032トン(s)、現在の備蓄量は3万2834トン(s)



戦時物資の集積場の面積は倉庫・区画を合わせてフットボール場200個分である

ただし、現実には起こりうる事態からすれば、実際に増援として必要とされるのは第25歩兵師団の第1または第2旅団や、第2歩兵師団の第3旅団といったストライカー装甲車を主要装備とする旅団戦闘団、特殊作戦対応のた

察衛星や、無人機などからの画像も映し出すことが可能だろう。司令官と各作戦幕僚は、居ながらにして現場の状況を近リアルタイムで把握できるものと考えてよかろう。

センターの奥には作戦会議室も設けられており、司令官以下十数名の上級幕僚が一堂に会する。先に有事に際しては、太平洋軍の下で1TFが編組されると述べたが、その司令部が海軍あるいは空軍といった他軍種に置か

れば、1CofWDは1TFの陸軍部隊の司令部として機能することとなる。またこの司令部が米陸軍に置かれることとなれば、1CofWD自体が1TF全体の前方の頭脳部として機能することになるわけで、一戦術司令部を明らかに上回る充実した設備は、こうした状況に備えたものだと考えよう。

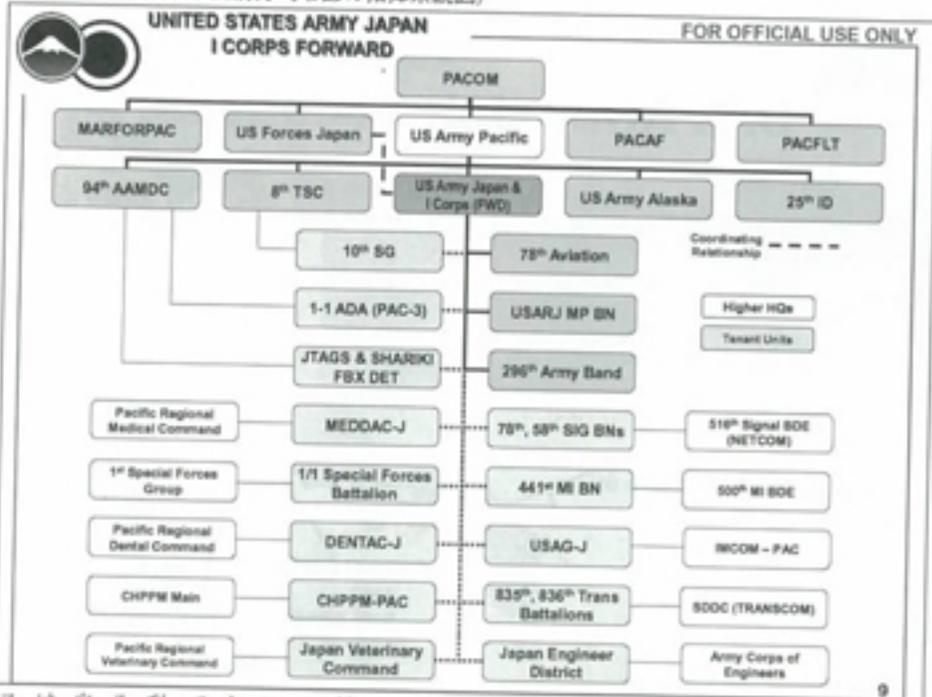
わが国に直接関係する有事・非常時で考えられることは、目下のところ北朝鮮などから

の弾道ミサイル攻撃や、コマンド/特殊作戦部隊による局地的な攻撃で、大規模な災害の発生としては規模の大きな地震や津波、台風被害などが考えられる。こうした事態には、当然陸・海・空の自衛隊部隊も対処にあたるから、当分の間、米陸軍としては戦車・歩兵戦闘車を中心とする機甲部隊や、砲兵部隊と言った重装備戦力はほとんど必要ない。

陸上や島嶼地域での歩兵戦闘部隊としては、在日米海兵隊の第3海兵遠征軍の中核となる第3海兵師団があるため、陸軍として大きな部隊を用意する必要は、それほどあるまい。

わが国への増援兵力としては、母体となった第1軍団のテナント部隊が考えられ、理論上は現役部隊である第25歩兵師団や、第2歩兵師団第3旅団、第4歩兵師団(機械化)、第101空挺師団(空中強襲)、第2機甲騎兵連隊、州兵部隊の第1軍団砲兵、第66航空旅団、第111防空砲兵旅団、第35工兵旅団などもテナントとなりうる。

(在日米陸軍&第1軍団前方司令部の指揮系統図)



これらを見る限り、米陸軍としては平時に抑止力として必要だと考えられる部隊をわが国に駐留させておき、限定的な規模の非常時や有事にはこれらの部隊と、米軍から展開する増援部隊の調整と運用にあたり、同時に陸上自衛隊を主に情報面で支援することになると考えてよいのだろう。

司令部のもう一つの機能は、陸上自衛隊との共同演習・作戦、他の東アジア地域の国々との演習・作戦に備えて、必要な場所へ移動・展開することである。すでにわが国の陸自との指揮所演習では、ヤマサクラやノース・ウィンド、オリエ

ント・シールド、ライジング・サンダーなどをこなしてきており、タイで行われている多国間実動演習コブラ・ゴールドにも要員を参加させている。また今年の二月には、日本国内では初めての移動・展開指揮所演習として、北海道でヤマサクラが陸自北方面隊と共同で実施されることになっており、前方展開司令部としての機能が試されることとなる。

コマンドセンターから見た司令部の機能・能力

1CofWDの有事における実際の作戦指揮能力とは、具体的にどのようなものなのかについては、機密とされているので、正確なところは述べられないが、陸軍広報担当将校の案内で見ることの出来た作戦指揮所/コマンド・センターの様子からすると、数列にずらりとならんだデスクトップ型の情報処理端末には、司令官を始め各部署・部隊幕僚の指定が見られ、特定地域における陸軍司令部としての機能を持つことがわかる。

正面には大柄なスクリーンが複数あり、ここには他の司令部・指揮所から送られてくる動画を含めた画像が表示される。必要に応じて司令官にアクセス権限が認められれば、偵



バタバで武器捜索任務中の第2歩兵師団第4ストライカー旅団戦闘団の49歩兵A中隊の歩兵たち

の可能性に米陸軍が備えるものなのであり、このためにコマンドセンターの機能は、こうした戦力への作戦指揮・調整能力・情報処理能力を備えた大きなものとなっているわけだ。

将来への課題

1C0FWD関連の主な施設には、コマ

ンドセンター以外にも〇九年四月上旬に神奈川県相模原補給廠内で着工された、戦闘指揮訓練センターがある。これはコンピュータを使ったシミュレーション訓練施設で、地上一階建て、本棟の広さはおよそ三三〇〇㎡で最大約三〇〇名を収容できるといふかなり立派なものだ。

完成予定は二〇一〇年の九月頃だが、この戦闘訓練センターの狙いは米軍と陸上自衛隊との共同訓練施設とすることで、日米の各部隊が車輛や装備類を持ち込むことなく、シミュレーション訓練を積み重ねることで、部隊と共同運用の習熟度を向上させてゆこうというものだ。これとも関連して、二〇二二年度の末には陸上自衛隊中央即応集団の司令部が、朝霞駐屯地からキャンパス座間に移転する。そうなれば新しい訓練センターは、米軍再編の一環でもある日米の防衛面での連携強化の象徴的なインフラとして活用されることとなる。

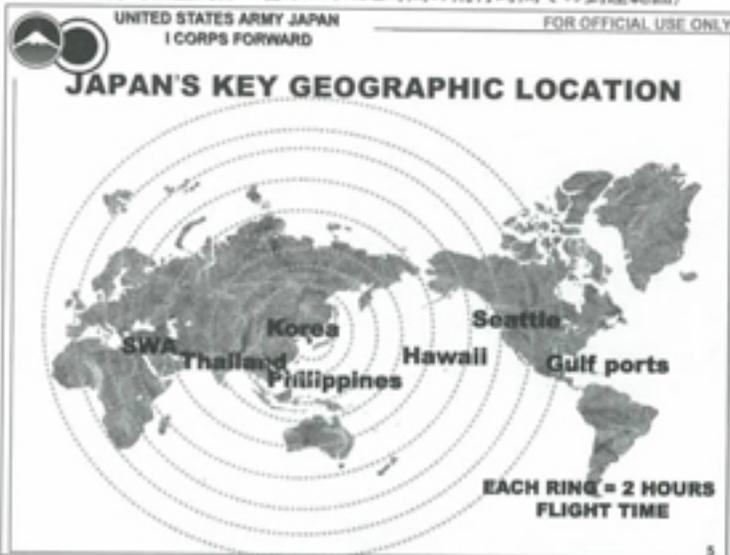
現時点で考えられる訓練内容には、わが国本土の防衛、島嶼地域を含めた局地的な戦闘、対ゲリラ・コマンド戦闘、ミサイル防衛などが、これら以外にも大規模災害時における救援活動が考えられているという。

わが国におけるこうした有事・非常時では、何よりも早く異変を知ることが肝心で、同時に日米双方とも第一線部隊の練度と即応能力を、可能な限り高く維持しておくことが欠かせない。この意味では陸自の中央即応集団司令部が1C0FWDと同じ敷地内に位置し、共同訓練と指揮・情報面で密接な連携が物理的、技術的にとりやすくなることは、わが国の防衛力の質的な向上にとっては望ましい。

ただ、ここでわが国にとっての大きな課題も浮き彫りとなる。米陸軍では自らの再編事業として、これまで述べた1C0FWDとその関連施設を着々と整備してきている。そこでわが国の陸上自衛隊が、米陸軍との連携を含めて陸上防衛を成り立たせようとするのであれば、当然陸自の将来像・ビジョンを明確にしていかななくてはなるまい。日米間で同盟関係が存在する限り、詰まるところ米軍の再編とは、わが国においては一方のパートナーである防衛省・自衛隊に将来への備えを問いつけるものなのである。

この意味から、今度の取材を通じて今後のわが国の陸上防衛力のあり方を考えざるを得ないことも痛感された。米陸軍と陸上自衛隊とのこれからの連携の進展に注目したい。

〈日本の地勢的位置関係：各リングは2時間の飛行時間での到達範囲〉



めの第75レインジャー連隊や第1特殊作戦群からの増援部隊、第555工兵群、それにミサイル防衛分野のPAC3やTHAAD（終末高々度防衛）ミサイル部隊ぐらいたらう。そして平素から備えておくべきものは、在日

の各部隊とこうした有事に米本国から受け入れられる可能性のある増援テナント部隊を支える補給支援態勢、それに陸上を始めとする自衛隊との連携、統合作戦指揮能力の向上だ。

ちなみに、現時点での在日米軍部隊の人員規模は約四万七〇〇〇名で、内訳は陸軍が約二四五〇名、海軍が約一万七六〇〇名、海兵隊約一万四八〇〇名、空軍約一万二七〇〇名、沿岸警備隊一四〇名で、主な部隊は先の陸軍部隊に加えて海軍の第7艦隊の中核となる原子力空母と水上戦闘艦隊（CTF70）、空母航空団（CVW5）、揚陸艦隊（CTF76）、攻撃型原潜部隊（CTF74）、海洋警戒機部隊（CTF72）、海兵隊の第3海兵遠征群と水陸戦部隊（CTF79）、第1海兵航空団、空軍（第5空軍）の第18航空団（混成）、第35戦闘航空団、第374空輸航空団がある。

規模の大きな有事・危機切迫時となれば、当然陸軍部隊だけでなく海軍や海兵隊、空軍部隊も増援を受け入れるから、わが国と周囲の海上に



大規模有事の際に増派される第4歩兵師団（4th ID）の重戦団戦闘団

展開する米軍の総兵力は、人員だけで七、八万人から一〇万人程度に膨れあがることだろう。先のJTFとは、わかりやすく言えばこれらを中心とした軍種横断型の戦域統合部隊となるわけだから、文字どおり一大戦力となる。1C0FWDとは、こうした将来の有事